

Title	カール・マルクス：人間の自己疎外と商品の物神性
Sub Title	Karl Marx : "die menschliche Selbstentfremdung" and "Fetischcharakter der Waare"
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1950
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.43, No.1 (1950. 7) ,p.41- 56
JaLC DOI	10.14991/001.19500701-0041
Abstract	
Notes	特集・経済学者と世界像 = Economists and their "Weltbild" 論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19500701-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19500701-0041</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

觀的に過ぎるように思われる。然しケインズにとつては、今日もまた戦争の結果による一時的現象に過ぎないのである。樂土の建設は百年後のことであり、社會がこれを信じて協調するならば、必ずそれは實現され得るものなのである。將來の歴史の推移のみがこの正否を證明し得るであらう。

(註) Seymour E. Harris, *The New Economics*, 1947. 日本銀行調査局邦譯、第二分冊を見よ。

### カトール・マルクス

——人間の自己疎外と商品の物神性——

### 遊 部 久 藏

»Wir wissen, dass die neun Kräfte der Gesellschaft, um gutes Werk zu verrichten, nur neue Menschen brauchen.....« — Die Revolutionen von 1848 und das Proletariat.

『資本論』第一卷をよむ人々は、冒頭の労働の二重性に関して論じた節(第一章第二節)に次のような文章を見出すであろう。なに氣なくよんでしまえばそれまでであるが、もしそこになにかしら著者の底意のようなものを豫感した讀者は容易にそれをよみすごすことをゆるされないのであらう。私はこの短い一文の中に實はマルクスの經濟學の對象や方法に關する根本思想を見出しうると考えるものである。で、先ずこの一文を掲げ、これに解釋を加えつつ、マルクス經濟學全體の特質に論及してゆきたいと思う。マルクスはそこで次のようにのべている。

「しかし商品の價值は、人間的労働そのものを、人間的労働一般の支出を、表示する。いま、ブルジョア社會におい

ては、將軍とか銀行家とかが大きな役割を演じ、人間そのものはこれに反して極めて見すばらしい役割を演じているのであるが、この場合の人的労働もまたそうである。(Der Wert der Ware aber stellt menschliche Arbeit schlechtin dar. Verausgabung menschlicher Arbeit überhaupt. Wie nun in der bürgerlichen Gesellschaft ein General oder Bankier eine grosse, der Mensch schlechtin dagegen eine sehr schätzbare Rolle spielt, so steht es auch hier mit der menschlichen Arbeit.)<sup>(註一)</sup>

商品価値の實體が抽象的・人間的労働であることはひとの知るところである。これは商品の分析によつて得られた結果である。しかし問題は商品の二要因たる使用価値と価値とが、同じく二重の労働たる具體的・有用的労働と抽象的・人間的労働とが、それぞれ別々のものではなくして一つのものであるということにある。即ち商品は全體として使用価値であると同時にまた全體として価値なのである。また商品の中には二つの種類の労働が含まれているのではなくしてあるのは一箇同一の労働であるということである。いま商品の二要因についてみると、商品はさしあたりその自然的形態のままの使用価値であるかのようなのであるが、そうではなくしてその社會的形態たる価値として我々にせまりきたるのである。商品をさしあたり使用価値として解するものは未だ常識的な立場に立つのであつて商品經濟の要求する本來の立場以前にあると云わなければならぬ。即ち労働生産物の商品形態はとりも直さず価値形態であつて、かかる現實の商品においては商品はさしあたり価値として現象する。さればこのような商品においては商品の使用価値は価値の實現形態(Verwirklichungsform)あるいは現象形態(Erscheinungsform)として意義を有する(seiten als)あるいはとして實存する(existieren als)。ここに商品の使用価値の「歴史的・獨立的性格」がみとめられる。だが更によく考えてみると、さきの常識的立場も無下に排斥しえないことをするのであつて、たとえ商品はさしあたり

り価値であるにしても、商品自身はやはり商品體として自然的屬性を有しておりそれ自身使用価値そのものなのである。だから商品の価値形態においては顛倒——マルクスはこれを「quid pro quo」(「一物と他物との置換え」と呼ぶ。——)が生ずる。それはまさに商品の内容たるべきものがその形式と化し、一方、形式たるべきものがその内容と化するという交替であり俗稱であり背理である。かく商品の二要因の間に顛倒關係がみられるが、かかる關係こそ商品における對立物の現實のありかたであり、統一状態にはかならず、この理はそのままに二重の労働についてもみられるのであつて——何故なら商品の二要因は二重の労働の體現だから——、換言すれば、商品にふくまれた具體的・有用的労働は抽象的・人間的労働の實現形態あるいは現象形態として意義を有しあるいはとして實存する。ところが、そのような商品の二重性格は——マルクスによれば——ブルジョア社會における人間の二重性格に對應するのである。いな對應するだけではない。両者は關聯するのである。まず對應の面からみてゆくと、ブルジョア社會においては人間——生きた現實の人間は商品と同じように自然的形態と価値形態との統一である。この社會においても人間は人間である。人間そのもの、あるがままでの人間、いわば自然的形態にある人間の存在することは疑いえない。がこのような人間はそのままではブルジョア社會における市民權を賦與されない。人間はこの社會で生活するためにはそれぞれこの社會にふさわしいとりどりの扮装をこらさなければならぬ。將軍となり、銀行家となり、いなによりもこの社會の二大基本階級たるブルジョアジーかプロレタリアートかいずれかに屬しなければならぬ。が、ひとたび彼がこのような社會的扮装をこらすとなると、おどろくべきことには、もとの本來の、ありのままでの人間はこのような扮装の單なる擔い手と化し去るのである。ちやうど商品の使用価値が価値の擔い手となつてしまふように、生きた人間個人の實體である人間そのものがその社會的形式である階級的人間の單なる形骸(形式)と化し、一方、階級的人

間としての彼が人間そのものとしての自己を生きる個人の實體たる地位から逐い出して自らその地位を僭稱する。人間の価値性格がその自然的性格を支配する。だからして人間そのものは極めて見すばらしい役割を演じる。ここにも *quid pro quo* がうかがえる。しからば商品の二重性格と人間の二重性格との関係はなににもとめらるべきであろうか？ 商品が資本制生産過程の成果であるということのうちに兩者の關係をもとめらるであろう。即ち資本制生産過程はそれに特有の生産關係のもとにおこなわれる。したがつてそこにおいては特殊の生産關係、資本家と労働者との生産關係が切り結ばれている。商品は資本制生産過程の成果であるから、當然成果としての商品のうちにかの生産關係が反映されざるをえないであろう。いわば資本制生産に特有の人間關係及びこれに制約される人間形態が商品のうちに對象化され、物象化されて表現されているのであつて、商品の二要因の對立統一の具体的なありかたはいわば資本制生産關係におかれた、かの人間の独自の實存様式を表示していると云える。

『資本論』冒頭の第二節から引用したさきの一文の意味を私はかく解するが、更にこの解釋を布行しつつ、マルクス經濟學の特質——對象と方法との独自の規定——を概言するとする。

(註1) *Das Kapital*. Band. I. *Volksausgabe besorgt vom M.-E.-L.-Institut*. 1932. S. 49. 長谷部文雄氏譯、一九一頁。

(註2) しかもこの場合、商品が自己の価値を表現する側(相對的價值形態)にあるか、他の商品の価値を表現する側(等價形態)にあるかによつて更に立入つた詮索を必要とするが——それが價值形態論の課題である——、いまこれに立入らない。拙稿「使用價值の價值化について」『季刊理論』第一三號參照。

## 二

さきの一文にマルクスは自ら註してヘーゲル『法哲學』第一九〇節の參照をもとめている。しかも言葉少なにその參照をもとめているにとどまる。で我々は『法哲學』をひらいて當該箇所をみるとしよう。ヘーゲルはそこで次のようにのべている。

「法においては人が、道徳的立場においては主觀が、家族においては家族員が、市民社會一般においては市民(Bourgeois)としてのものが、對象である。——この慾望の立場においては、人間といわれるものは表象の具體的產物である。だからしてここにおいてははじめて、そしてまた本來ここにおいてのみ、かかる意味における人間が問題となるのである。」(註1)

即ちヘーゲルはここでブルジョア社會における人間のそれぞれの立場よりする特殊化、結局分裂を論じているのであつて、かくして人間そのものは單なる慾望の主體に墮せしめられる。かかる人間の特殊な實存様式——ブルジョア的及びプロレタリア的階級人としての——はたしかに人間存在の具象化にはちがいないが、しかしそれにおいてはもはや全體としての人間、そのものが抽象されているから、それは「抽象的な具象化」(K・レヴィット)にとどまる。ヘーゲルはかくの如き觀點からブルジョア社會における人間の特殊化の諸契機を展開する。『法哲學』はそのような意味で近代ブルジョア社會の理論的再現であるが、ヘーゲルはこの場合、あくまでブルジョア社會のロゴス化された立場に徹底したということが注目されるべきである。それというのも、もともと、人間をその普遍的な本質にしたがつて精神として規定した彼の立場に一貫しており、彼の哲學が絶対精神の哲學であることを端的に示している。

青年マルクスがそれと遮二無二に闘わねばならなかつた當のものはこのようなヘーゲルの體系であつた。若々しいマルクスの視野の前にたちはだかつた巨大且つ無氣味なロゴスの體系がまず打破されねばならなかつた。彼は自らの

立場をエンゲルスとの共著『神聖家族』(二八四五年刊)緒言において「現實的ヒューマニズム」(realer Humanismus)と號している。<sup>(註3)</sup>かかる立場から、人間を地上的慾望——その體系がブルジョア社會であるが——の主體とみなし、この種の人間のみを問題とするヘーゲルの體系が批判された。そしてこの批判の過程でマルクスにとつて極めて示唆的であつたのが僅かならぬフョイエルバッハの唯物論である。フョイエルバッハの全努力は——レヴィットの指摘する如く——ヘーゲルの精神の絶対哲學を人間の人間の哲學に變化させることにそがれた。しかしフョイエルバッハのいわゆる人間とはただの感性的主體としての人間でしかない。そこに、あれほどフョイエルバッハに心酔したにかかわらず——エンゲルスは晩年、「我々はみな一時はフョイエルバッハ黨であつた。」と述懐している。<sup>(註4)</sup>——マルクスがフョイエルバッハをも批判せざるをえなかつた理由が見出せるのである。かくしてマルクスは(エンゲルスとともに)性愛と友情とのほかに感性的對象としての人間について知ることなきフョイエルバッハと訣別する。マルクスにとつての人間そのものはフョイエルバッハとは異り現實の物質的生産のうちにおかれた人間、したがつて歴史的・社會的に規定された人間である。これは一見——自然主義的人間觀の歴史的・社會的觀點による超克という點において——ヘーゲルの立場への逆行のようであるが、しかもそれでいて一面、「精神」としての人間の根底に自然の人間を、人間そのものを洞察し、したがつて一般にロゴスの世界をロゴス化されたものとして把握した點においてマルクスはむしろフョイエルバッハへの立場に依據してヘーゲル體系を超克したとも云いうる。ここに初期マルクスの本來の立場がある。<sup>(註5)</sup>自ら標榜したものの、「現實的ヒューマニズム」の立場——少くとも當時のイデオロギーとしての——は、實質上、彼によつて相當初期——思想家としての——から彼自身のうちにおいて止揚されていたといつてよからう。そして早くもこのような批判的立場にマルクスをしてたまためたものが、彼の「人間の自己疎外」(menschliche Selbstentfremdung) という觀念である。<sup>(註7)</sup>さきにマルクスはフョイエルバッハの感性的人間に代わるに物質的生産のなかにおかれた現實の人間をもつてしたとのべたが、このような現實の人間、社會的生産過程におかれた人間こそまさに自己疎外の頂點に立つ人間なのである。もともと疎外をもたらすものは、根本的には分業と私有財産であり、その意味でそれは商品經濟の歴史とともにふるいと云いうる。しかしその完成は、商品經濟の完成としてのブルジョア社會においておぼえてみられるところである。即ちこの社會における階級対立——資本家と労働者との——こそ人間の自己疎外を徹底する。即ち生産手段をもたぬ労働者は賃労働をいとむむことによつて生活を維持するが、かくすることによつて彼は労働を媒介とする人間を自然との原生的統一状態をやぶり、また自己自身のうちに分裂——人間そのものと賃労働者としての人間とへの——をもたらさざるをえない。労働によつて人間は猿から人間へと進化し、人間たりのたのであるが、彼からの労働生産物の疎外、労働の疎外、種属の疎外<sup>(註8)</sup>はふたたび人間を動物の状態へとおしもり人間の疎外が完成される。だが人間の疎外は労働者のみにおきるのではなく、その他者——資本家の側にもおきる。彼はいわばいたさらに蓄積のための蓄積の衝動にかられる資本の人格化となる。あたかも労働者が労働力商品の人格化となる如くに。「物象の人格化と人格の物象化(Personifizierung der Sache und Versachlichung der Person)」<sup>(註9)</sup>「全資本制生産様式の特徴たる、社會的生産諸規定の物化と、生産の物質的諸基礎の主體化」<sup>(註10)</sup>。かくして資本制生産様式そのものの主要當事者たる資本家と賃労働者とは、このおのおのの資格においてはそれぞれた資本と賃労働の體化たり人格化たるにとどまる。人間の自己疎外の完成。それは全く人間のおかれた現實の社會的生産の様式によつて規定されたものである。ヘーゲルがえがいた市民社會における人間像の實體はかくの如きものであつた。しかしヘーゲルはこの市民社會の體系——それは「理性の世界計畫」にしたがう。——に自己満足を感じ、そのなかに安定感

カール・マルクス

をいだいた。もちろんヘーゲルは當時の一方の側における富の蓄積に對立する貧困の増大をみのがさなかつた。が貧困によつて生じた窮乏大衆——市民社會の秩序から脱落しつつにはこれに對して叛逆するところの——はヘーゲルによつて「賤民」と名づけられ、結局市民社會の悟性形式のもとに服従すべきものとされた。フョイエルバッハの批判の對象はヘーゲルによるこのような人間の理性計畫化にあつた。<sup>(註10)</sup>マルクスは前述の如くフョイエルバッハの批判——それは市民社會からの脱出を「我と汝」の愛の共同體にもとめる。——をも超克しつつヘーゲル體系に挑んだ。その立場として人間の自己疎外がえらばれたということがとりも直さず彼をしてかかる市民社會の呪物性からの人間の脱出する道をも教えたのである。即ちそれはプロレタリアートのうちに新しい人間の可能性を見出すということである。かくしてプロレタリアートによる現在社會秩序に對する闘争——共產主義革命の實踐によつて人間の自己疎外が止揚される。人間による人間の解放が成就される。はじめて人間が人間となる。人間の(労働を媒介とする)自然との原生的統一状態が復活する。一八四四—四五年代に書かれた諸著作にはかかる思想がいきいきと吐露されている。<sup>(註11)</sup>けれどもマルクスの思想の發展はここで大きく旋回し同時に著しく深化した。即ち彼はプロレタリアートのうちに新しい人間の可能性を見出すことから更にすすんで、かかるプロレタリアートの成立とその歴史的・階級的使命の自覺とをもたらす諸條件の探究へとたち向つたのである。マルクスは『神聖家族』(一八四五年刊)において、「これかれのプロレタリアがあるいは全プロレタリアートでさえが一時的に目標と考へたところのものが問題ではない。あるところのもの(vas est)、『このあるもの(diesem Sein)に適應して歴史的に何をなすべく強要されているか、が問題である。プロレタリアートの目標及びその歴史的の行動は、彼自身の生活状態及び現在のブルジョア社會の全組織のなかに明らかに、否定すべからざるように示されている。』<sup>(註12)</sup>とのべているが、ここにプロレタリアートがその

行動の指針を見出すべきものとして指摘された、「あるもの」、即ち「彼自身の生活状態及び現在のブルジョア社會の全組織」がつきに解明さるべき課題としてあらわれたのである。哲學者マルクスの經濟學者マルクスへのメタモルフォーゼ。フョイエルバッハをはじめとするヘーゲル左派及び眞正社會主義の批判の書、『ドイツ・イデオロギー』(一八四五—四六年執筆、遺稿)はそのような意味でマルクス(及びエンゲルス)の「我々の從來の哲學的良心の清算」<sup>(註13)</sup>の貴重なモメントである。

(註1) Grundlinien der Philosophie des Rechts, herausgegeben von Edward Gans, Dritte Auflage, 1854, S. 250. 田村實氏譯、下巻、六八頁。但し引用は説明の部分のみ。

(註2) Karl Löwith; Max Weber und Karl Marx. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 67, 1932, S. 182.

(註3) ここにのべている。「現實的ヒューマンイズムの最も怖るべき敵は、ドイツにおいては現實の個人に代りに『自意識』あるいは『精神』を置き、傳導師とともに『人を生かすのは精神である、肉は何の役にも立たないものである。』と教える唯心主義者なわち思辨的觀念論である。」(Die heilige Familie, Marx-Engels Gesamtausgabe, herausgegeben von V. Adoratski, Erste Abteilung, Band 3, 1932, S. 179.)

(註4) Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Klassischen Philosophie, 1836, Marxistische Bibliothek, Band 3, 1927, S. 24.

(註5) だからもしひとが青年期マルクスについて、ヘーゲル時代、フョイエルバッハ時代、マルクス時代を劃するならば、私はこれに賛同しえない。しかしいまこゝに詳論の餘裕がない。ちなみにいわゆる史的唯物論と稱されるマルクスの根本思想は、遺稿編纂者——例えば『ドイツ・イデオロギー』編輯の任にあつたリャザノフ、のちにアドラツキー——によれば、一八四五年の秋より

おそくなく、多分一八四五年春ころ定式化されたと云われる。

(註6) 『ドイツ・イデオロギー』、リヤザノフ版、編者緒言、M・E全集、第一五巻、二九八—九、三〇三頁参照。

(註7) 「火間の自己疎外」の觀念は最も初期の論文「第六回ライン州會議事」『Die Verhandlungen des sechsten rheinischen Landtags. 1842』にまであとすけるが、その最も完成された勞作としては、一八四四年執筆の遺稿、『經濟學—哲學ノート』『Ökonomisch-philosophische Manuskript』があげられる。

(註8) Kapital. Band. I. S. 119.

(註9) Ibid. Band. II. S. 987.

(註10) 現代の實存主義哲學の始祖キェルケゴールの哲學の出発點もまたここにあつた。ヘーゲルの理性哲學の批判をめぐるフォイエルバッハ、キェルケゴール、そしてマルクスの體系の對峙は、今日考察するべき哲學上の好箇の課題であると思う。ともかく時代史的にみてヘーゲルとの決定的訣別を同時代人、キェルケゴールとマルクスとが對立する方向において具體化したということは明らかである。(Löwith. S. 198. 及び S. 265-6. 参照。)

(註11) 例へば參照—Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. 1844. Aus dem literarischen Nachlass von K. Marx u. F. Engels. 1841 bis 1850, herausgegeben von F. Mehring. Band. I. Vierte Auflage. 1928. S. 397—8. Ökonomisch—philosophische Manuskript. 1844. Marx-Engels. Gesamtausgabe. Erste Abteilung. Band 3., herausgegeben von V. Adoratskij. 1932. S. 92—8.

(註12) Die heilige Familie. S. 207.

(註13) Zur Kritik der politischen Ökonomie. Volksausgabe besorgt vom M-E-I-Institut. 1934. S. 6.

### 三

「私を襲つた疑問を解決するために企てた最初の勞作は、ヘーゲル法哲學の批判的検討であつて、その序論は、一八四四年パリで公けにされた『獨佛年誌』に現われた。私の研究は、法律諸關係ならびに國家諸形態は、それ自身で理解されるべきものでもなく、またいわゆる人間の精神の一般的發展によつて理解されるべきものでもなく、むしろそれは、物質的の生活諸關係——その總和を、ヘーゲルは十八世紀における英佛人の先蹤にならつて、『ブルジョア社會』という名稱のもとに總括している——にその根據を有するものだとしたこと、しかもこのブルジョア社會の解剖學的

研究は、これを經<sup>ポリティカル・エコノミー</sup>濟學のうちを求むべきものだとしたこと、の結論に達した。」(註1)

かように自らその最初の經濟學上の體系的著作、『經濟學批判』(一八五九年刊)序言<sup>フレイツェル</sup>において往年を回顧している如く、マルクスの専攻の學問はほぼ一八四四、五年を境として従來の法學、哲學、及び歴史學から市民社會の解剖學としての經濟學へと轉換した。マルクスの市民社會に對する批判の最初の立場は前述の如く人間の自己疎外であり、いまだ「哲學的」であつた。かの『ドイツ・イデオロギー』においてかなり明確に表明された史的唯物論の立場といえどもいまだ「假説」たるにとどまつていた。しかし、その後、『經濟學批判』を経て『資本論』第一卷(一八六七年)がマルクスの手によつて刊行されてより、史的唯物論はもはや「假説」たることをやめたのである。それは科學的に立證された命題となつた。(註2) 即ちマルクスは史的唯物論の實證を近代社會の經濟學的解剖としての『資本論』において遂行した。『資本論』は史的唯物論の適用、その具體化である。と同時に、これによつてマルクシズムはじめて「科學的社會主義」にまで成長した。(註3) かくして青年期マルクスにおける「現實的ヒューマニズム」の殘滓はいまや完全に止揚されたのである。

『資本論』の研究對象についてマルクスはその第一版序言において次のように明確に規定している。曰く「近代社

會の經濟的運動法則を暴露することは本著の最後の窮極目的である。<sup>(註4)</sup> しかれば「近代社會の經濟的運動法則」の暴露の著者にとつて如何に史的唯物論は有效であつたであらうか？ 史的唯物論によれば社會の窮局の基礎は物質的生產過程であり、そこにおいては生産力と生産關係との對立と統一とがみられる。しかるに歴史上一個特定の生産過程としての資本制生産過程は労働過程と價值増殖過程との統一である。労働過程においては生産力が、價值増殖過程においては生産關係が表現される。資本制生産過程の生産物は商品である。商品を生産する労働は労働過程に作用するものとしては具體的・有用的労働であり、價值増殖過程に作用するものとしては抽象的・一般的労働である。具體的・有用的労働は（自然素材と結びついて）商品のうちに使用價值として、抽象的・一般的労働は價值として體現される。商品の二要因、及びそのうちに含まれた二重の労働の定立は、かくして商品の資本制的生産過程における二契機——労働過程と價值増殖過程とによつて根據づけられる。しかるに一般に生産過程において生産力と生産關係とは對立し統一されているが、その具體的ありかたにおいては生産力の發現形式としての生産關係が前面にあらわれる如く、資本制生産過程においては労働過程は價值増殖過程に對して目的に對する手段の關係に立ち、本來生産過程の内容であるべき労働過程——それは一面においては「人間と自然との間の質料變換の一般的條件」、「人間の生活の永遠的自然條件」としての性格をもちかね有する。——がその形式と化し、一方價值増殖過程が却て内容の地位を僭稱する。quid pro quo。）、資本制生産過程の成果たる商品においてもこの種の顛倒がみられる。抽象的・一般的労働は價值が、具體的・有用的労働は使用價值に取つて代わつて内容となり、後者が前者の形式へと貶される。

だが經濟學にとつて根本的に重要な問題はかかる顛倒そのものではなくしてかかる顛倒された形態において「近代社會の經濟的運動法則」を把握するということである。元來、經濟的運動の初發の前提はすべて異質的なるもの等一化、いわば質の量化であるが、これは資本主義社會においては使用價值の捨象、價值形態（價格形態）の成立を意味し、それはそれで前述の顛倒——私はこれを使用價值の價值化と呼ぶ。——を前提とする。使用價值の價值化、具體的・有用的労働の抽象的・一般的労働化、及び労働過程の價值増殖過程化、こそ全經濟活動の發條である。と同時にそれはまた資本制社會特有の神秘的性格（及びこれに取憑れた「古典的」及び「近代的」俗流經濟學の諸流派）の發生する地盤でもある。かかる神秘的性格は商品の物神的性格（Fetterscharakter）においてまずあらわれる。かくしてありふれた感性的な物としての机は、ひとたびそれが商品として登場するや否や、感性的にして同時に超感性的なものとなる。更にこの商品物神はつきつきに貨幣物神、資本物神、土地物神等々をうみだしてゆく。だがかの顛倒を基礎とする資本制社會特有の神秘的性格の發生は同時に僞購的性質——資本家にとつて有利な、労働者にとつて不利な——、（及び僞購的表象の理論化たる資本家經濟學）の發生でもある。即ち價值形態——商品形態の成立を基礎とする異質的なるもの交換過程における平等化は、その平等化の背後にある不平等なるもの——したがつて平等關係は實は不平等關係の假象でしかない。——を隠蔽する。例えばひとは資本と労働との等價交換、「自由・平等・所有及びベントム」の背後にひそむ飢ゆる自由・生産手段所有の不平等・無所有及び窮乏、労働の資本に對する形式的「實質的從屬、剩餘價值の生産、搾取！」に想いをいたすべきである。しかもかかる不平等、階級對立は經濟現象の表面にあらわれることなく、一日幾十億回となく「平等の原理」に基いて商品——労働力商品をも含めて——が交換されゆく。かかる經濟上の平等こそまた政治上の平等（ブルジョア民主主義）の基底であり、かくして總じて「平等の觀念は商品生産における一般的・人間的労働の平等性から生れる。」<sup>(註5)</sup> されば『資本論』におけるマルクスの課題は二重である。（一）平等化の原理を基礎とするブルジョア社會における全經濟過程の追窮、經濟的諸範疇の全數量關係の説明、及



び(二)かかる全經濟過程、全數量關係の背後に存する階級關係の闡明、これである。換言すれば、ブルジョア社會における人と人との關係、生産Ⅱ階級關係をそれがよつて以て表現されている物と物との關係、物象的關係の面をとおして探求するのが、『資本論』の課題である。したがつてまた、「ここで諸人格が問題となるのは、たゞ彼等が經濟的諸範疇の人格化であり、一定の階級諸關係及び利害關係の擔い手である限りにおいてである。」<sup>(註6)</sup>

(註1) Zur Kritik der politischen Ökonomie. S. 4. 宮川實氏譯、一〇——一頁。

(註2) レーニン著、川内唯彦氏譯「人民の友とは何ぞや」、二六五頁。

(註3) F. Engels; Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. 1894. Vierte Auflage. S. 26.

(註4) Kapital. Band. I. S. 7-8. 譯、一一六頁。

(註5) 「反ブローリング論」手稿、M・E全集、第二二卷、五一四頁。

(註6) Kapital. Band. I. S. 8. 譯、一一六——一七頁。

## 四

かくして我々は『資本論』の世界の外に『資本論』の立場をみとめることができよう。『資本論』の世界とはいわば『資本論』において展開された資本のロゴス(近代社會の經濟的運動法則)そのものである。『資本論』の立場とはかかる資本のロゴスをあくまでロゴス化としてとらえる、社會を自然の社會化とみる立場、いわば史的唯物論という世界観である。だがそもそもマルクスが『資本論』においてかかる立場にたちえたのは、その青年期において「人間の自己疎外」を手がかりとして人間世界の統一的全體を把握しえたからであり、ここに史的唯物論の定式化を

經て『資本論』によるその實證という後期マルクスの思想の發展と初期マルクスの思想の形成との聯關があり、一言にして云えば、「人間の自己疎外」の克服Ⅱプロレタリア革命成就の諸條件探究のために、「哲學者」マルクスより「經濟學者」マルクスへと轉生した意義が見出せるのである。即ちブルジョア社會において人間そのものが階級的人間として實存することをながめ、逆に階級的人間の根底に人間そのものを洞察しえたマルクスにしてはじめて、かかる疎外の尖端に立つ人間形態——それを制約するのは資本制生産關係である。——の端初的な物象的表現としての商品形態のうち、全資本制經濟を理解するための「鍵」を見出しえ、逆に商品から貨幣へ、貨幣から資本への全ロゴスの展開をなしえたといふ。されば『資本論』においても——レヴィットの指摘する如く——批判の「人間學的根本義」(anthropologischer Grundsinn)は失われていない。<sup>(註1)</sup>そこにまた、我々は『資本論』の論理の内實が有する實踐的性格をも察知しうるであらう。即ち使用價値の價値化、具體的・有用的労働の抽象的・一般的労働化、及びそれらの根據としての労働過程の價値増殖過程化、更にこれらの「顛倒」の上に聳立する一聯の經濟過程に特有の神秘性、僞瞞性は、人間の自己疎外の物象的表現にほかならず、したがつてまた、使用價値の價値からの、具體的・有用的労働の抽象的・一般的労働からの、結局労働過程の價値増殖過程からの解放、一切の神秘化、僞瞞化の解消はプロレタリア革命の遂行によつてなしとげられる。要するに將軍とか銀行家とかが大きな役割を演じ、人間そのものが極めて見すばらしい役割を演じるというようなことのない社會においてはじめて、人間の労働の特殊な意義も消滅するであらう。

我々は冒頭所引の商品論中の一節をかく解し、同時に經濟學の對象と方法とに關するマルクスによる規定をここに見出すものである。

(註1) Löwith; Ibid. S. 184. 及び S. 139. を参照。なおこゝに「言すれば、批判の「人間學的根柢」が『資本論』において失われていないにしても、それが『資本論』においては初期の「人間の自己疎外」を中心とする思想におけるほど強烈なものではなく、むしろ弱められていることはみのがされてはならない。それは『資本論』が経済學上の勞作であるから、という形式的理由によるものではない。プロレタリアートによるプロレタリアート及び他の諸階級、要するに人間全體の解放という思想(現實的ヒューマンイズムの殘滓)は、實はマルクス・ヒューマンズによつて後年において自己批判されたのである。このことは例えばエンゲルス著『イギリス勞働者階級の狀態』(一八九二年版、序言にあきらかである。(Die Lage der arbeitenden Klasse in England, herausgegeben von V. Adoratskij. 1932. S. 318. — 9.) したがつて『資本論』における批判の「人間學的根柢」と云われるものについても單純にこれを初期の思想と同一視してはならない。この點本稿においては充分詳論しえなかつたが、全體の論述がこれを暗示していると思う。さればK・レヴィットの解釋——それから我々はある示唆を得たが——に全體として追隨することは極めて危險である。彼はむしろ、「マルクスの窮局の意欲は終始變ることなく『人間の人間の解放』、『現實的ヒューマンイズム』にあつた。」とのべ、ルソーとの歴史的關係を指摘してさへいる。(S. 177.) なお名和統一氏は——その極めて善意に富んだ稿、「マルクス主義とヒューマンイズム」(『時論』昭和二年三・四月號)において多くの混亂と無理解と——例えばヒューマンイズムと「現實的ヒューマンイズム」との混亂、歴史上の一定のイデオロギーたる「現實的ヒューマンイズム」とマルクスの「人間の自己疎外」の觀念(後者は前者の殘滓だ)との混同、「現實的ヒューマンイズム」が初期マルクスにおいて事實上超克されていることの見落し、初期マルクスの思想のみをとりあげて後期について全くふれず、したがつてヒューマンイズムの媒介性に關する無頓着など——を重きねられている。私自身、マルクス主義とヒューマンイズムとの關係についてはこゝに、ちあらたに再考すべき必要を感じているが、それは名和氏の立場とは著しく異なるであらう。

—一九五〇・五・二—

### ケインズ經濟學の發達

鈴木 諒

J・M・ケインズの「雇傭、利子及び貨幣の一般理論」は、リカード、マシヤル等の正統學派の經濟理論と違つて、均衡の内部構造を分析すると云ふよりも、現實の經濟を以て一連の不安定なる均衡の系列と見て、この不安定なる均衡から次の均衡への移行過程を説明するために、動學的發展の具體的法則を求めようとしてゐるところにその特徴があると云へよう。正統學派の均衡は、つねに完全雇傭下の安定均衡であつた。そこには、適應の過程における摩擦的失業は存在してゐても、所謂「非自發的失業」と云ふものは存在せず、均衡に到達した後においては、完全雇傭の達成と云ふことが保證されてゐた。この様な均衡が成立するのは、マシヤルによつて明確に示された様に、正統學派の賃銀理論が次の二つの

ケインズ經濟學の發達

五七 (五七)

公準の上立つてゐたからである。

(一)實質賃銀は、勞働の限界生産物の價値に等しい。(勞働需要の法則)

(二)勞働者が新たに獲得する實質賃銀の限界效用は、勞働者が新たに勞働することによつて蒙る勞働の限界苦痛に等しい。(勞働供給の法則)

即ち、第一公準は企業の立場から見ても、収益遞減法則の作用による勞働の限界生産力の低下と、企業家がこれに支拂ふべき實質賃銀とが相等しくなつたときに、企業家利潤が極大となると云ふ見地から導かれたものである。これに對して、第二公準は勞働の限界苦痛の遞増と、勞働者が新たに獲得する賃銀の限界效用の遞減法則の作用の下において、この兩曲線が相交する點において、實質賃銀が定まると云ふ説明が與へられてゐた。この第二公準によれば、もし實質賃銀が下落すれば、實質賃銀の